

Revisiting the Idea of Antipartyism: Republicanism and the Republican “Schism” in Early 19th-Century Virginia

ENDO Hirobumi

Abstract

This article provides an overview of the historiography on the idea of antipartyism and examines the partisan turmoil in early 19th-century Virginia. Antipartyism is a concept used by American historians to describe antipathy toward political parties or factions in the early republic era. During the 18th century, the term “party” literally meant partial interests of a society, as opposed to the public good. Although it has been said that the classic idea of antipartyism was replaced by modern partisan politics in the early 19th century, historians have discovered that antiparty sentiments continued to retain their significance until at least the mid-19th century. Given the gradual transformation of the idea of “party” from a negative concept to a positive one, we can find one of the most significant phases in “the Revolution of 1800,” by which Jeffersonian Republicans came to power in place of the Federalists. It is true that there are numerous studies on the Jeffersonian victory in 1800, but most historians have conventionally viewed it as “the rise of democracy” and overlooked the internal conflicts among Republicans. Based on studies debating the idea of party in the early republic, and on those criticizing “the democratic interpretation” of the Progressive historians, this article reinterprets the contemporary implications of the debate over “republican principles” in early 19th-century Virginia.

「党派忌避の観念」再考 ——19世紀初頭ヴァージニアにおける 党派性と共和主義

遠 藤 寛 文

はじめに

党派（party）の存在は、人間社会から切り離すことはできない。「党派の潜在的原因をなす種は、… 人間本性のなかに蒔かれている」としたジェームズ・マディソンの言葉通り、ジェームズタウン入植以来の北米英領植民地の歴史をひとたび紐解けば、多種多様な党派が形成と消滅を繰り返してきたことがわかる。アメリカ革命における愛国派と忠誠派の対立や、憲法制定論争におけるフェデラリスト派と反フェデラリスト派の対立は、その最も良く知られた例といえよう。19世紀半ばまでには成立する民主党と共和党が、現在のアメリカの二大政党の源流となっていることは周知の通りである¹⁾。

このように、党派の発生はもはや人間社会の必然とも思われうるが、実のところ18世紀のアメリカではこのような考え方は必ずしも広く共有さ

1) Alexander Hamilton, James Madison, and John Jay, *The Federalist*, ed. Jacob E. Cooke (Middletown, Conn.: Wesleyan University Press, 1962), 58.

「党派」と「政党」は、ともに party または faction の訳語であり、一般に前者の方が後者よりも「未発達」であるという含意が認められるものの、両者は必ずしも厳密に区別できるものではない。なお、英語の party と faction の区別については、以下を参照。Richard Hofstadter, *The Idea of a Party System: The Rise of Legitimate Opposition in the United States, 1780-1840* (Berkeley: University of California Press, 1969), 10-11.

れてはいなかった。すなわち、古典的思想の影響が色濃く残っていた 18 世紀の思想世界においては、党派の存在自体が忌避されており、「部分利益」たる党派は「公共善」の実現を阻害するとして根絶せらるべきものと理解されていたのである。ところが、19 世紀半ばにもなると、政治における党派の存在を誰もが受容するようになる。かつては異なる意見をもつ党派が存在することすら認めなかったのに対して、次第に対立する党派を同じ政治体を共有する対抗勢力として見なすようになったのである。つまり、18 世紀末から 19 世紀前半にかけて、党派の観念は劇的な転換を遂げたことになる。

歴史家は、このような党派に対する忌避感の解消こそが、「デモクラシー発展」のメルクマールであると見なしてきた。というのも、政情が不安定な国ほど、政権と対立する党派が反体制勢力と見なされる傾向があるのに対して、成熟したデモクラシー国家では、対抗勢力（野党）は体制内部に包摂され、自由かつ平穩に政治活動をおこなうことが認められると考えられたからである。とりわけ、20 世紀半ばに影響力をもったコンセンサス史学は、アメリカが建国以来、革命、反動、クーデターといった事態に陥ることなく、他の諸国に先駆けてデモクラシーを実現したことを強調してきたのである²⁾。しかしながら、本稿において確認するように、いち早くデモクラシーを「発展」させたとされるアメリカの地においても、党派を忌避する思想は、少なくとも 19 世紀中葉までは根強く残存していたのである。

本稿は、アメリカにおける党派忌避の観念（antipartyism）をめぐる研究史を再検討しつつ、19 世紀初頭のヴァージニア州における党派抗争に着目する。建国初期に連邦政治を指導したフェデラリスト派は、1800 年の大統領選挙によってリパブリカン派に政権を奪取される。このことは

2) Ibid., preface.

「1800年の革命」(Revolution of 1800)と呼ばれてきた。この選挙が「革命」と呼ばれるのは、「支配権を握るある民衆政党から他のそれへと統治権力が平和的に移譲された〔世界史上〕最初の事例」であると見なされてきたからである³⁾。それまでのエリート主義的で中央集権国家を目指すフェデラリスト派政権に代わって、人民の声を代弁するリパブリカン派政権が生まれたことは、「ジェファソニアン・デモクラシー」という民主的な時代の幕開けを告げたと説明される。このリパブリカン派主導の政治的伝統は、1820年代末には「ジャクソニアン・デモクラシー」へと受け継がれ、アメリカのデモクラシーが形作られていくとされてきた⁴⁾。

しかしながら、このような「デモクラシー発展」の物語は、歴史の細部を覆い隠してしまう。1800年大統領選挙以降、トマス・ジェファソン（在1801-1809）、ジェームズ・マディソン（在1809-1817）、ジェームズ・モンロー（在1817-1825）という三人のヴァージニア出身者が24年間にわたって大統領職に就いたことから、とりわけ19世紀最初の四半世紀は「ヴァージニア王朝」(Virginia Dynasty)の時代と呼ばれ、その体制の堅固さが強調されてきた。とはいえ、19世紀初頭に盤石な統治基盤を築いたと考えられてきたリパブリカン派の内部では、実のところ深刻な対立が生じていた。というのも、1801年に政権に就いたリパブリカン派は、連邦権力を制限するとしていたかつての主張を貫徹できなくなり、政権に対する反発が党の内部から巻き起こったのである。その党内抗争が最も顕著にみられたのが、他ならぬ大統領の「お膝元」にあたるヴァージニア州だ

3) Ibid., ix.

4) この種のデモクラシー史観を最も明確に定式化したのは20世紀初頭の革新主義史学である。ジェファソニアンの農本主義的デモクラシーを強調した例として、以下を参照。Charles A. Beard, *Economic Origins of Jeffersonian Democracy*, 3rd ed. (1915; New York: McMillan, 1956).

1790年代におけるジェファソニアンの思想的編成を共和主義との関係から論じた研究として、以下を参照。Lance Banning, *The Jeffersonian Persuasion: Evolution of a Party Ideology* (Ithaca, N.Y.: Cornell University Press, 1980).

ったのである。注目すべきことに、ヴァージニアの州政治の主導権を握っていたのは、リパブリカン派に属する州東部のプランター階層であり、州内の民主化を訴える州西部の独立自営農民層の声を代弁していたのはフェデラリスト派であった。つまり、エリート主義的な特権階級たるフェデラリスト派勢力を民主的なリパブリカン派が打ち破るという通念的な図式が、リパブリカン派最大の根拠地であるはずのヴァージニア州では当てはまらないのである⁵⁾。本稿が19世紀初頭のヴァージニアに関心を寄せるのはこのような理由による。

以下では、第1節にて初期共和国時代の党派観をめぐる研究史を概観する。続く第2節にてヴァージニア政治の特徴を確認したのち、第3節にてヴァージニア州内の諸党派について検討する。

第1節 初期共和国時代の党派観

20世紀を代表する米国史家であるリチャード・ホフスタッターの晩年の著作『政党制の観念——合衆国における合法的反対勢力の台頭、1780-1840』（1969年）は、その後の諸研究に多大な影響を与えた古典的研究である。まずここでは、ホフスタッターの議論の要点を確認した上で、1970年代以降における研究史の展開を見てみたい。

ホフスタッターの最大の関心は、「合法的な反対勢力」(legitimate opposition)、すなわち「野党」という観念がアメリカで受容される過程を描き出すことにあった。18世紀には、政治における党派の存在は害悪と見なされ、政権を批判する反対派は「不忠、国家転覆、体制反逆」⁶⁾と区別がつかなかった。クーデター、暴動、暗殺など流血の惨事を招かずに政権

5) Norman K. Risjord, "The Virginia Federalists," *Journal of Southern History* 33, no. 4 (1967): 517.

6) Hofstadter, ix.

移行を実現した「1800年の革命」をホフスタッターが重視するのはこのためである。ただし、重要なことに、責任ある「合法的な反対勢力」を実現せしめた当のジェファソン本人は、政党の必要性を感じていなかった。つまり、1790年代から1800年代にかけての建国期には、フェデラリスト派とリパブリカン派の双方の側が互いを合法的な勢力とは見なさず、対立党派の存在を政治体における「腫れ物」と見なしていたのである⁷⁾。

とはいえ、党派忌避の思想は、18世紀においてすら一辺倒だったわけではない。ホフスタッターは、18世紀英米世界における政党観の三つの類型を提示している。第一のボリングブロック＝ハミルトンの政党観とは、あらゆる党派を根絶することこそが国全体の団結と調和をもたらすとする「ユートピア的」思想である。第二のヒューム＝マディソンの政党観とは、党派の害悪を認めつつも、それは穏健な精神によって制御されうるとする考え方である。第三のパークの政党観とは、党派ないし政党の存在は不可避であるだけでなく、必要であるし、均衡が保たれる限りにおいて善きものであると考える立場である。それぞれ、古典的政党観、過渡的政党観、近代的政党観と表現することもできよう。興味深いのは、第三のパーク的な立場に相当する同時代のアメリカ人は思い当たらないとホフスタッターが述べている点である。すなわち、19世紀前半のアメリカでは、政党組織化が進むことになるが、その当事者たちは政党を忌避する観念を放棄していなかったことが示唆されるのである⁸⁾。

ホフスタッターはこのような18世紀的諸前提を踏まえつつ、建国期からジャクソン期にかけて、政権と対立する勢力が「合法的」、すなわち体制内存在として受容されていく過程を叙述している。ホフスタッターの叙述の限界として、そこにデモクラシーの「発展」(development)を善と

7) Ibid., vii-xiii.

8) Ibid., 16-33.

捉える価値的前提を見出すことは容易である。反対党派を包摂する政党制の「確立」こそが安定した近代デモクラシーを実現するという見解は、本書が執筆された1960年代末の時代背景を色濃く反映しているといえよう。

コンセンサス史学とは一線を画する新政治史学の立場から、ジャクソン期における党派忌避の観念について取り組んだのが、史家ロナルド・フォーミザーノによる研究（1969年）である。社会史の影響を受け、1970年代に隆盛した新政治史学とは、旧来の政治史とは異なり、民族文化的背景を重視しつつ民衆の投票行動を読み解く史学潮流である。フォーミザーノは、とりわけミシガン州の事例に注目しつつ、党派忌避の観念が1830年代の政党編成に及ぼした影響力を指摘する。党派を忌避する傾向は、民主党ではなく、ウィッグ党の側で顕著であった。対立するジャクソニアン of 党派政治を忌避する主張が、ウィッグ党が有権者の支持を得るための原動力となり、新たな政党編成に結びつくという逆説的な状況が見られたのである。さらに、フォーミザーノは別の論文（1974年）においても、敬意を重視する伝統的な政治文化の長期的持続を指摘しており、制度化された政党が出現する1830年代後半から1840年代前半よりも前の時代は、「敬意と参加の政治」（deferential-participant politics）という過渡期の局面として理解するべきだとしている⁹⁾。

共和主義研究の強い影響下に、ジャクソン期の党派観の問題を再考したのが、史家メジャー・ウィルソンによる研究（1988年）である。ウィルソンは、一方で、政党を「近代化の産物」（a product of 'modernization'）と位置づけつつも、ジャクソン期の政党制の「近代性」を過度に強調する

9) Ronald P. Formisano, "Political Character, Antipartyism and the Second Party System," *American Quarterly* 21, no. 4 (1969): 683-709; idem, "Deferential-participant Politics: the Early Republic's Political Culture, 1789-1840," *American Political Science Review* 68, no. 2 (1974): 473-487. ウィッグ党の党派観については、以下も参照。Daniel W. Howe, *The Political Culture of the American Whigs* (Chicago: University of Chicago Press, 1998), chap. 3.

ことを諫めている。共和主義研究の進展を踏まえ、18世紀カントリー思想の与えた影響を読み込むことにより、ウィルソンはこの過渡期における複雑な党派観を理解することを試みている。ウィッグ党を重視したフォーミザーノとは異なり、ウィルソンが目指するのは、むしろ政党組織化をいち早く実現した民主党の側の言語である。というのも、ウィッグ党からの批判に対して、民主党は、前近代的な共和主義の言語を用いて自らの政党組織を擁護していたというのである。政党の組織化を実現し、「アメリカ政党の父」とも呼ばれるマーティン・ヴァンビューレン（後の第8代大統領）にすら、18世紀カントリー思想の影響を見出しようとウィルソンは指摘する¹⁰⁾。これに対して、史家マーク・W・クルーマンの研究史論文（1992年）は、共和主義が単に残存していたかのように理解すべきではないと主張する。建国期から南北戦争期に至る時代を扱う諸研究の共和主義的解釈を網羅的に概観した上で、ジャクソン時代のいわゆる第二次政党制のもとで、革命期には見られなかった平等主義（egalitarianism）のモメントがアメリカの共和主義思想を変質せしめたことをクルーマンは的確に指摘している¹¹⁾。

このように、1970年代以降、新政治史学や共和主義研究の隆盛のなかで、党派忌避の観念をめぐる議論は確実に深まりを見せた。しかし、政党史家の関心は第二次政党制が再編成される1820年代以降に向かう傾向が強く、また共和主義研究の関心は革命および建国の時代である18世紀末頃に集中しがちである。その結果、両者の関心の狭間に位置する、19世

10) Major Wilson, "Republicanism and the Idea of Party in the Jacksonian Period," *Journal of the Early Republic* 8, no. 4 (1988): 419-23.

11) Marc W. Kruman, "The Second American Party System and the Transformation of Revolutionary Republicanism," *Journal of the Early Republic* 12, no. 4 (1992): 509-537. 19世紀共和主義における平等主義の要素を強調する例として、ウィレンツによる職人共和主義の研究がある。ショーン・ウィレンツ（安武秀岳監訳、鶴月裕典訳、森脇由美子訳）『民衆支配の讃歌——ニューヨーク市とアメリカ労働者階級の形成 1788～1850（上・下）』（木鐸社、2001年）。

紀初頭の思想的かつ政治的混沌状況を適切に説明づける研究が乏しいのも事実である。以下では、諸研究を参照しつつ、「共和国の原理」の意味をめぐってリパブリカン派の内部に党派分裂が生じた19世紀初頭のヴァージニアを具体的に検討してみたい。

第2節 ヴァージニア政治の特徴

革命以前、ヴァージニア植民地の政治文化は、少なくとも表面上、党派性を欠いていたとされる。議会選挙において重視されたのは、候補の人格や社会的地位であって、争点や政策に対する彼らの態度ではなかった。その後、革命期から憲法制定期を通して、ヴァージニアでも激しい対立が見られたが、「ヴァージニア王朝」の指導者たちの党派に関する見解は、18世紀ヴァージニアの党派性を忌避する文化に深く根ざしていた¹²⁾。

しかしながら、このことは、初期共和国時代のヴァージニアに党派対立が生じなかったことを意味するわけではもちろんない。政党史家のリチャード・P・マコーミックによれば、確かに、北部諸州と比べて、ヴァージニア州の政党組織化は進んでいなかったが、少数の指導者層による非公式の調整 (informal arrangements) を通して政党運営がなされていたのだという。少数の指導者層は、社会的背景、経済的基礎、貴族的価値観を共有する社会的エリートではあったが、政治的見解をも共有していたわけでは決してなかった¹³⁾。

ヴァージニア州政治の最大の特徴は、植民地時代以来の遺産を受け継ぐ州東部地方とアパラチア山岳地帯の移民入植者を主とする州西部地方のあいだの対立関係に求められる。19世紀初頭の州西部では人口が増加しつ

12) Hofstadter, 47-9.

13) Richard P. McCormick, *The Second American Party System: Party Formation in the Jacksonian Era* (New York: W. W. Norton, 1973), 180-81.

つあったにもかかわらず、州政治の実権を東部プランター層が握っていたこともあり、適切な州議会議員数割当が実現されなかった。このため、長らく西部は東部支配層に対する不満を抱き続けていたのである。さらに、西部の不満は、選挙権をフリーホルダーのみに制限してきた財産資格要件にも向けられた。これらの改革要求は、1830年の州憲法改正による長期借地人に対する選挙権付与などの成果をもたらすも、ヴァージニアではこれに続く1851年の州憲法改正まで白人成年男子普通選挙制は実現しなかった。政党の「近代化」、あるいはデモクラシーの「発展」において、ヴァージニアは北部諸州に遅れをとったと評される所以である¹⁴⁾。

本稿の冒頭でも述べたように、ヴァージニアではフェデラリスト派とリパブリカン派のイメージが逆転しており、州内におけるデモクラシーの主唱者は、むしろフェデラリスト派の側だった。このことに留意しつつ、以下の第3節では、19世紀初頭の州内諸党派について検討する。

第3節 ヴァージニアの諸党派

(1) フェデラリスト派

建国期のヴァージニアは、「才能のギャラリー」と呼びうるほどに、多くの傑出した政治指導者を輩出した¹⁵⁾。合衆国憲法制定論争で憲法案批准の是非が争点となった際にも、一方ではジョージ・ワシントン、ジェームズ・マディソン、エドモンド・ランドルフ、ジョン・マーシャルといったフェデラリスト派（憲法案支持派）が、他方ではパトリック・ヘンリー、

14) Ibid., 180-81. なお、州西部住民の東部プランター支配に対する不満は、南北戦争期におけるウェストバージニアの分離独立にまで繋がる問題である。以下も参照。William G. Shade, *Democratizing the Old Dominion: Virginia and the Second Party System, 1824-1861* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1996).

15) Hofstadter, 47.

ジョージ・メイソン、ジェームズ・モンローといった反フェデラリスト派（憲法案反対派）が、それぞれ指導力を発揮した。1790年代のフェデラリスト政権時代には、ヴァージニア州内も二大党派に編成されていた。史家ノーマン・K・リスジョードの研究（1967年）によれば、従来の通説とは異なり、ヴァージニアでは、1780年代のフェデラリスト派（憲法案支持派）と1790年代のフェデラリスト派とのあいだに、一定の継続性を見いだせるという。つまり、憲法制定論争におけるフェデラリスト派と反フェデラリスト派の対立は、永続的な政党に発展することはなかったにせよ、州内における世論の分断線として機能し続けたというのである¹⁶⁾。

それでは、具体的には州内におけるフェデラリスト派の根拠地はどこにあったのか。フェデラリスト派が比較的強い影響力を有したのは、デルマール半島の南端に位置する東部沿岸地方と、ポトマック川とラパハノック川に挟まれたノーザンネック地方からブルーリッジ山脈にまで至る州北部の一带、さらにはアパラチア山系のシェナンドアヴァレー地方などであった。とりわけ、州の北部は、アメリカ革命のはるか以前より、タバコ栽培による土壌の疲弊を受けて、小麦、コーン、その他の穀類への生産作物の転換が進行していた地域だった。この地方で生産された穀類は、アレクサンドリアの商人を介して西インド諸島や南欧へと輸出された。このため、この地方の人々は、海上貿易の支援を連邦政府に求め、フェデラリスト派への支持を強めたとされる。これに対して、ピードモント地方やサウスサイド地方のタバコプランター層は、すでに英仏の市場が比較的保証されていたこともあり、強力な中央政府を必要としなかった。さらに、1785年に結成されたポトマック会社によるポトマック川上流開発の進展により、この地域の土地価格が上昇し、上流部と下流部の経済的一体性が生じた結果、アレクサンドリアはヴァージニア北部の商業中心地となっていっ

16) Risjord, "The Virginia Federalists," 488.

た¹⁷⁾。

他方、長老派のスコッチアイリッシュ系移民およびルター派などのドイツ系移民が多く入植したシェナンドアヴァレー地方とそのさらに西側の山岳地帯は、ヴァージニアの他の地域とは大きく異なる民族文化的背景を有していた。アパラチア山脈の山麓にあたるピードモント地方が沿海地方のプランターの西進によって入植が進んだのとは異なり、山岳地方の入植民の多くはペンシルヴェニアなど北方より南下して移住した農民が多かった。ヴァレー地方の住民は、1780年代に合衆国憲法案を支持しただけでなく、1790年代を通してフェデラリスト派を強固に支持し続けた。この背景には、西部住民が一貫してインディアンの駆逐を求めている事情もあるとされる。これら諸地域の勢力を束ね、ヴァージニアにおけるフェデラリスト派の中心拠点をなしたのが、チェサピーク湾の内奥に面する港湾都市アレクサンドリアであった¹⁸⁾。

(2) リパブリカン主流派

とはいえ、ヴァージニア政治を長きに渡って支配したのは、フェデラリスト派ではなく、リパブリカン派であった。その指導部とされた集団が、リッチモンド・ジュント (Richmond Junto) である。20名にも満たなかったとされるこの集団の内実は秘匿にされ、その成員と目されていた者たちもその存在を公然と認めることはしなかった。史家ハリー・アモンによれば、リッチモンド・ジュントの歴史は、1800年大統領選挙キャンペーンに遡るといふ。1800年の選挙に際し、ヴァージニアではジェファソンに票を固めるべく、リパブリカン派の主導によって大統領選挙人の選出方式が地区選出制から一般チケット制へと変更された。これにより、地方の

17) Ibid., 496-8; Arthur G. Peterson, "Flour and Grist Milling in Virginia: a Brief History," *Virginia Magazine of History and Biography* 43, no. 2 (1935): 104.

18) Risjord, "The Virginia Federalists," 498-502.

主導権は大きく失われ、州指導部への権力集中が加速することになる。その後も、選挙の度に、州のコーカス（幹部会）に対してジュントは影響力を行使したと信じられてきた¹⁹⁾。

リッチモンド・ジュントの第一の特徴は、ブルーリッジ山脈以東のプランター層の利益を徹底して追求したことに求められる。このため、州西部の求める内陸開発政策、保護関税政策、憲法改革などに対して、ジュントはことごとく反対した。第二の特徴は、集団内部の血縁的な結びつきに求められよう。名望家政治において政治家が縁戚関係にあることは珍しくはないが、アモンが示している通り、ジュントの主要な構成員と見られた者の多くが親族的繋がりを有していた。リッチモンド・ジュントのなかでも、特に指導的な役割を果たしていたとされるのが、州都リッチモンドの地方紙エンクワイヤーの編集発行人であったトマス・リッチーである。新聞の社説記事を通して、リッチーはジュントの見解を公に知らしめる役割を担っていた。さらに、ウィルソン・C・ニコラスとリッチーの従兄弟にあたるスペンサー・ローンの二人は、リパブリカン派の政策方針の決定において指導力を発揮したとされる。ジュントの内部では、一時的な対立が生じることはあっても、その同質性は維持され続けたという²⁰⁾。

このように、「ヴァージニア王朝」期のリパブリカン派政権をヴァージニア州内より支えていたリッチモンド・ジュントは、19世紀前半のアメリカ史を理解する上で無視することのできない集団といえるが、関連する研究の数は決して多くない。というのも、そもそもジュントの存在自体が神話なのではないか、という疑念がなお残るからである。この「リッチモンド・ジュント神話」の成立背景を検証しているのが、史家F・ソーントン・ミラーの研究（1991年）である。ミラーは、ジュントの存在が声高

19) Harry Ammon, "The Richmond Junto, 1800-1824," *Virginia Magazine of History and Biography* 61, no. 4 (1953): 395-6.

20) *Ibid.*, 397, 399-401.

に非難されるようになる背景として、州内地方新聞の編集発行人どうしの党派対立と競争意識があったことを明らかにしている。アモンはジュントの成立を1800年選挙に求めるのに対して、ミラーは第二次米英戦争後、とりわけ1820年代にジュントの存在が顕在化したと見る。歴史家のあいだでも見解が分かれるのは、実在を証明する史料が不十分であることによる。さらに、仮にジュントの存在を示しえたとしても、その指導力は何によって測ることができるのか、という点も慎重に検討する必要がある。このように多くの課題を抱えてはいるが、ヴァージニアのリパブリカン派の中核を担った集団を史学的に検証することは不可欠の作業であると思われる²¹⁾。

(3) リパブリカン反主流派

オールド・リパブリカン派 (Old Republicans) とは、リパブリカン派のジェファソン政権が、1800年選挙において勝利した後に、フェデラリスト的な政策を採用したことに対する反発として生じたりパブリカン派の党内派閥である。リパブリカン派政権がフェデラリスト派の政策を踏襲するさまは、反主流派の目には「ネオ・フェデラリズム」(neo-Federalism) として映ったのである²²⁾。政権を批判する彼ら保守派は、「オールド・リパブリカンズ」と自称した。この「オールド」という限定には、「1800年以前のリパブリカニズム」というニュアンスが込められている。すなわち、君主政の復活すら模索しているかに見えたフェデラリスト派の専制に抗し、「共和国の原理」を堅持する使命を帯びていた在野時代のリパブリカン派への回帰を彼らは目指したのである。彼らが依拠するのは、抑圧的な外国

21) F. Thornton Miller, "The Richmond Junto. The Secret All-Powerful Club: or Myth," *Virginia Magazine of History and Biography* 99, no. 1 (1991): 63-80.

22) Hofstadter, 172. 拙稿「新大陸における『帝国』の残滓——1812年戦争期の『親英勢力』とアメリカの自画像」『アメリカ研究』第51号(2017年)、1-20頁。

人・治安諸法（1798年）に対して、ジェファソンおよびマディソンが提起した「ケンタッキー・ヴァージニア決議」（Kentucky-Virginia Resolutions）に見られる権力制限の理論であった。

オールド・リパブリカン派の一員であると目された代表的な人物は、以下の通りである。議場における極端な言動で知られた連邦下院議員ジョン・ランドルフ、南部州権論を定式化した理論家ジョン・テイラー、その叔父にあたるエドモンド・ペンドルトンらのヴァージニア人のほか、ノースカロライナ州の連邦下院議員ナサニエル・メーコンなどが有力な構成員であった。オールド・リパブリカン派のなかでも、特にランドルフに近い立場の人々は、「ターシャム・クイズ」（Tertium Quids, 第三の何か）、すなわち第三政党に類する集団として見なされていた²³⁾。とはいえ、運動の中心はヴァージニアであり、ノースカロライナやペンシルヴェニアに同様の政権批判の動きが見られたものの、州の境を越えた相互の連携は乏しかった。

オールド・リパブリカン派とは、ヴァージニア州内のいかなる社会的背景をもつ人々だったのであろうか。ミドル・タイドウォーター地方およびジェームズ川以南のサウスサイド地方のプランターに多くのリパブリカン保守派が見られた。これらの地方は、建国期より反フェデラリスト派の牙城であった。州東部および北部で小麦や穀類生産への移行が進んでいたが、州南部および州中央のピードモント地方はなおタバコ生産を継続していた。これらの地方は、政権を支持する主流派の指導者も多く輩出しているため、地方利益と党派性を結びつける単純化は禁物である。ただし、党内保守派の多くが富裕な奴隷所有プランターであったことも確かである²⁴⁾。

23) “Old Republicans”と“Tertium Quids”の違いを指摘する研究として、以下を参照。Noble E. Cunningham, Jr., “Who Were the Quids?” *Mississippi Valley Historical Review* 50, no. 2 (1963): 252–63.

24) Norman K. Risjord, *The Old Republicans: Southern Conservatism in the Age of Jefferson* (New

1806年頃に顕在化する、オールド・リパブリカン派の政権批判は、同時代の言葉では、リパブリカン派の「分裂」(schism)と呼ばれた²⁵⁾。ランドルフが公然と政権を批判するようになる直接のきっかけをなしたのが、ジェファソン政権によるジョージア州の西部土地売却に絡む詐欺事件であるヤズー土地問題の処理、およびスペインの実効支配下にあった西フロリダ領購入計画であった。ランドルフは、「我々は……国王の廷臣ではなく、我々がこれまで信奉してきた広範な諸原理に立脚するリパブリカンなのである。……紳士諸君は尻込みして、リパブリカンを装っているのだろうか。……我々はみなフェデラリストになってしまったと言われるであろう。」と議会で述べている²⁶⁾。後世の視点から見れば、「リパブリカン派」は単なる一政党に見えてしまうが、ランドルフの発言には、同時代人にとって「リパブリカンズ」がいかなる含意を帯びていたかがよく表れている。ランドルフが政権指導部のなかで最も嫌悪していたのが、当時の国務長官マディソンであった²⁷⁾。このため、マディソンが1809年に大統領に就任すると、ランドルフらは政権批判を一層強めた。連邦政府の強大化と対英関係の悪化を嫌う彼らは、イギリスに対する一連の通商規制諸法や、陸軍および海軍の予算拡充、さらには1812年戦争の対英宣戦決議にも反対したのである²⁸⁾。

York: Columbia University Press, 1965), 25-7.

25) マディソンは、リパブリカン派が多く地域で「[フェデラリスト派を利用する] 分裂 (schism) に陥っている」とモンローに宛てた手紙に記している。James Madison to James Monroe, May 17, 1806, *The Papers of James Madison*, Secretary of State Series, vol. 11, ed. Mary A. Hackett, J. C. A. Stagg, Mary Parke Johnson, Anne Mandeville Colony, and Katherine E. Harbury (Charlottesville: University of Virginia Press, 2017), 575-6.

26) *Annals of Congress*, 9th Cong., 1st Sess., 985.

27) Risjord, *The Old Republicans*, 40-43.

28) ただし、保守派のあいだでも主戦論に転じる者が増え、ランドルフら対英戦争反対派はリパブリカン派内部で孤立していった。Ibid., 7.

ランドルフ派の政権との決裂については、以下も参照。Donald A. Macphree, "The Yazoo Controversy: the Beginning of the 'Quid' Revolt," *Georgia Historical Quarterly* 49, no. 1 (1965): 23-43; David A. Carson, "That Ground Called Quiddism: John Randolph's War with the Jefferson Adminis-

とはいえ、歴史家がさほど関心を払ってこなかったリパブリカン派の「分裂」を改めて検討する意義はどこにあるのか。確かに、分裂によって生じた党内保守派は、頑強な反マディソン勢力を形成するものの、政権運営を揺るがすほどの影響力を発揮しえたわけではない。しかし、この「分裂」が、リパブリカン派の内側から生じた強大な政府に対する[・][・][・]原理的な拒否反応であることの重要性を見逃すことはできない。リパブリカン派の「分裂」は、ジェファソン-マディソンの立場を正統と見なすリパブリカン主流派史観からではとらえることができない、リパブリカニズムとナショナリズム（同時代的には中央集権化の意）の原理的な齟齬として理解するのである。従来、建国初期の熾烈な二大党派間の対立は、1812年戦争後に解消され、1810年代後半には「国内融和の時代」が訪れると説明されてきた。しかし、注意しなければならないことは、党派の間に和解が成立して党派対立が解消したのではなく、「リパブリカンズ」以外の政治党派の正統性を剝奪することによって、少なくとも表面的には党派が一元化していったということである。繰り返しになるが、同時代の文脈においては、「リパブリカンズ」とは単なる一政党を意味したわけではなかった。「原理」を放棄することに対する拒否反応は、リパブリカン派自身が進むべき途をめぐって逡巡していたことを表している。仮に19世紀が資本主義とデモクラシーの時代であるとすれば、「リパブリカンズ」は前世紀的な「原理」へと回帰する時代錯誤を運命づけられていたともいえる。米国史において繰り返し援用されることになる「原理」を明確に定式化したのは、他ならぬ19世紀初頭ヴァージニアのリパブリカン反主流派だったのである。

おわりに

本稿では、党派忌避の観念を主軸に、19世紀初頭ヴァージニアにおける党派抗争を概観してきた。本文中では、できる限り「共和主義」という言葉を用いないよう努めたのは、「リパブリカン」という語が持つ同時代的含意が、いわゆる共和主義思想の印象の強さによって失われてしまうのを避けるためであった。「リパブリカンズ」を自称する者たちに見られた、「共和国の原理」を貫徹するという多分に「前衛的」(avant-garde)な自負心は、必ずしも誇張ではないだろう²⁹⁾。19世紀以降、アメリカは、新世界の共和国という自意識を強めていくが、それは同時にますますその思想的内実を喪失していく過程でもあった。このパラドクスを理解する一つの鍵は、19世紀初頭の「リパブリカン」たちの自己矛盾と葛藤のなかにあるのではないだろうか。

本稿の執筆に際し、公益財団法人・松下幸之助記念財団の助成を受けたことを付記する。

29) 「前衛的」とはホフスタッターによる表現である。Hofstadter, 181.